

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 経 済 学 ）	氏名	宮 澤 和 敏
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目			
資本主義的動態論の展開—景気循環と構造変化			
論文審査担当者			
主 査	教 授	松 田 正 彦	印
審査委員	教 授	瀧 敦 弘	印
審査委員	教 授	森 良 次	印
審査委員	教 授	亀 崎 澄 夫	印
〔論文審査の要旨〕			
<p>宮澤和敏氏による本論文は、再生産の拡大を通して行われる資本主義経済の需給調整には時間がかかるという問題を基礎に、景気循環と構造変化を独自の理論によって考察するとともに、資本主義経済の歴史的動態を新たな視点で捉えることを目的としたものである。</p> <p>本論文は、方法を論じた序章と現代を歴史的に展望する終章の他、6章で構成されている。第1章「固定資本投資と利潤率不均等の調整」は、固定資本の存在が産業資本の部門間移動を制約し、利潤が基本的に自部門に再投下されることによって利潤率の不均等が各部門の拡大速度の相違によって調整され、その調整過程に景気循環を引き起こす原因があると論じる。第2章「社会的再生産と信用貨幣の供給機構」は、再生産過程の中で信用貨幣が順調に還流する条件を考察する。信用貨幣創造の基礎は、均衡的に編成された再生産における貨幣の還流にあるとされ、部門間不均衡が形成されると返済還流が停滞し信用創造の継続が困難になると論じる。さらに、固定資本投資の盛衰や通貨圏の部分性によってもたらされる信用機構の不安定性が指摘されている。第3章「自由主義期の景気循環」は、イギリス自由主義期の景気循環が部門間不均衡の調整過程であったと解釈し、イギリスの綿工業を基軸とする工業部門の資本蓄積が国内外の農業部門に対して過剰に行われることが景気の反転を促す基本的要因であったと結論づける。</p> <p>第4章「技術革新と構造変化」は、技術革新が雇用量と利潤率に及ぼす長期的な影響を分析し、新技術の普及過程が、新技術導入期・旧技術駆逐期・構造調整期・発展期の4局面を通して行われることが示される。第5章「構造変化の歴史的考察」は、資本主義の歴史において飛躍的な生産力の上昇をもたらした技術革新として、1</p>			

9世紀前半の綿工業の機械化、19世紀後半の製鋼業の革新、20世紀前半の電力の普及に伴う機械化という三つの事例を取り上げ、それらが資本蓄積の動態に及ぼした影響を考察している。第6章「資本過剰論の不況と『金融資本の蓄積様式』論」は、不況論の検討を行うと同時に発展段階論の枠組みを考察している。すなわち、不況において打開されるべき問題は部門間不均衡であり、それは諸部門の拡大速度の相違を通して調整されると指摘する。労働力に対する資本の過剰蓄積が生じた場合には、生産力の上昇による産業予備軍の再形成が必要となるが、それによって一般商品の過剰に起因する資本蓄積の停滞はかえって悪化すると論じる。産業予備軍が不断に形成されるという「金融資本の蓄積様式」の説く事態は、生産力の飛躍的上昇をもたらす新技術の普及過程において現れるのであり、生産力の上昇に伴う構造変化の過程を経て、資本主義経済は一定の技術的基礎に基づく発展過程を迎えると指摘する。そして発展段階論は、「金融資本の蓄積様式」の動態を一つの局面として含む発展構造の形成と解体の過程を対象として展開されるべきであると主張する。終章「現代資本主義分析に向けて」は、情報技術革新の影響をアメリカ経済に焦点をあてて概観し、グローバリゼーションの進展する現代資本主義の歴史的位相について考察している。また、中心国・先発国の停滞と新興国の発展を通して生産力の平準化と多極化が進んでいるという点から、現代資本主義の歴史的特徴を展望している。

以上のように、本論文は資本主義における景気循環と構造変化を独自の視点で理論的に考察したものである。そこでは、資本主義経済の需給調整には時間がかかるという市場像を基礎に理論が組み立てられており、資本主義経済の一般的な原理と歴史的な発展段階論の両方にその理論が適用されている。論文全体がそうした方法による一貫した論理で構成されており、従来にはない独自の理論展開がなされている。その結果本論文は、資本主義経済の景気循環と構造変化及び歴史的動態について、独自の理論形成と歴史解釈がなされたものであると論文審査担当者の意見は一致した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(経済学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。